

日藏上人蘇生譚に関する考察

岡田 真裕美

はじめに

昌泰四年（九〇一）、左大臣藤原時平の讒言により、醍醐天皇は右大臣菅原道真を大宰権帥として左遷する。二年後の延喜三年（九〇三）、道真は大宰府で亡くなった。

その後、早魃や疫病の流行が続き、延喜八年（九〇八）には道真左遷の際に時平に加担した藤原菅根が、延喜九年（九〇九）には左遷事件の首謀者である時平が相次いで亡くなる。延喜十三年（九一三）には、道真左遷の後に右大臣となった源光が横死し、翌々年には京都で疱瘡が大流行した。さらに、延喜二十三年（延長元年）（九二二）、時平の妹で皇后であった穩子と醍醐天皇の子である皇太子保明親王が、延長三年（九二五）には保明親王の子慶頼王が夭折するという出来事が続いた。朝廷では保明親王夭折の年に道真を本官に服している。そして延長八年（九三〇）には清涼殿に落雷があり、道真左遷に関わった藤原清貫ら

が死亡、醍醐天皇は病臥し、その年中に崩御された。道真の死後、わずか三十年ほどの間に、彼の左遷に関わった人々の大部分が亡くなってしまったのである。このような事件の連続は道真の霊の祟りであると考えられるようになり、『扶桑略記』など当時のことを記す文献には、道真の霊と災害や事件を結びつけた記述が多く確認できる。――

本稿で取り上げる、日藏上人が頓死し、太政威徳天となつた菅原道真や地獄に堕ちた醍醐天皇と対面して現世に戻ってくるという説話は、このような時代背景をもとに作られている。この説話は「北野天神縁起」をはじめ、中世の多くの文献に引用されていることで有名であるが^一、その中で最も長く詳細で、「日藏上人蘇生譚」原本^三に近いと考えられるのが、『北野文叢』巻十一所収の『日藏夢記』^四（以下『夢記』と略記する）である。その概略は以下の通りである。

A 道賢は、延喜十六年二月に初めて金峯山に入り、発心門椿山寺で出家後、六年間山に籠ったが、母が病であると聞いて入洛し、その後は年一回金峯山で修行すること十六年に及んだ。年来の国土の災難を憂い、四月十六日より金峯山の笹窟で安居を行った。途中、同行の沙弥が負傷したため帰れなくなり、更に三七日の無言断食を行っていると、八月一日に突然熱が出て息ができなくなり、亡くなってしまふ。

B すると、堀の内から禅僧の姿をした執金剛神が現れて雪山の水を道賢に与え、童子（廿八部衆）が飲食を持って来た。

C そこへ金剛蔵王菩薩が現れて、道賢を金峯山浄土へ導いた。蔵王菩薩は、道賢が前世は孔雀、女人であったことなどを教え、さらに、寿命が短いことを告げて「日蔵九々年月王護」と記された短札を与え、日蔵と改名し、仁敷上人に師事するよう勧めた。

D その時、西の空より日本太政威徳天が眷属を引き連れて現れた。太政威徳天は蔵王菩薩を礼拝したのち、自らが住む大威徳城へ道賢（日蔵）を案内した。大威徳天は、自分が菅原道真であること、怨心のために国土を滅ぼそうとしたが以前より重んじていた密教が隆盛しているため未だ巨害を為していないこと、但し眷属の悪神等が起す損害は禁じ難いことを告げ、もし

人々が道賢（日蔵）を信じて太政天の像を作り名号を称えて祈請すればその祈りに答えようと誓った。また、蔵王菩薩から与えられた短札の意味を問うと解釈し、懈怠せず精進するよう告げた。

E 大威徳城から金峯山に戻り、上のように話すと、蔵王菩薩は、世間の災難の根源を知らせるために遣わしたのだと告げ、さらに道賢（日蔵）を西南の空にある斗率天へと導いた。天女は和歌をもって道賢（日蔵）に答え、また、日本延喜王東宮太子や日本大将と対面した。静観、観賢、正宝等に導かれて斗率天の内院に至り、弥勒菩薩から斗率天への往生を約束される。

F 金峯山に戻ると、次に蔵王菩薩は道賢（日蔵）の兄が地獄に堕ちていることを告げ、北方の閻羅王宮へと導いた。閻羅王に生前の所作を問われ、涅槃経、法華経を誦すると、閻羅王は歡喜礼拝し、獄領に地獄を案内させた。法華涅槃の名号を誦すると火毒がおさまり地獄城に入ることができ、苦所を廻るうちに、鉄窟苦所に至り、灰燼のような姿になった延喜王（醍醐天皇）と三人の臣に対面した。延喜王は、太政天が仏法を滅し衆生を害する報いが自分のところに来ていること、父である満徳法主天が太政天をなだめるもその眷属が悪を為すのを止められないこと、自分には太政天に関する五つの罪があることなどを告げる。さらに、

このことを主上や国母、摂政大臣に伝え、一万卒塔婆を立てるなどの抜苦の法を修めるよう頼まれる。

G 閻羅王宮から金峯山に戻ると、蔵王菩薩は道賢（日蔵）を東方にある満徳法主天（宇多院）の宮城へと導いた。満徳法主天は、自分は本来化樂天に生じるべきところを、太政天の悪を遮止するためにこの地に留まっていること、怨みを抱いて亡くなった道真が、その福智力のために大威徳天神となったこと、延長八年の落雷や諸寺の火災、延喜王やその臣の絶命など、凡そ国土の災害は太政天とその眷属の仕業であることを告げた。そして、主上や摂政大臣にこのことを話し、示す場所に大威徳天祠と日本大天祠を作り、日本太政威徳天祠を建てて諸仏の像を安置するべきであると詳細に指示し、天慶三年を太政元年に、延喜通宝を太政通宝に改めるよう告げる。また、道賢（日蔵）がこの教えを信じて行わなければ大障をなし、信じれば外護者となると言った。

H 満徳天の命を奉じ終わって金峯山に戻ると、蔵王菩薩は、世間の災難、衆生の苦悩の根源を知らしめるために遣わしたのだと述べ、道賢（日蔵）に帰路を教え

I 巖穴に入ると思うと蘇生した。時に八月十三日、死門に入ってから十三日が経っていた。^五

この日蔵上人蘇生譚には広本・略本の二系統があったと考えられており、広本系に当るのがこの『夢記』であるとされる^六。略本系は『扶桑略記』天慶四年の条に所収の『道賢上人冥途記』（以下『冥途記』と略記する）であり、内容としては、前掲の梗概A、B、C、D、G前半（満徳天が、太政天祭祀のための要求を述べる部分を除いた箇所）、H、Iを適宜省略しながら載せ、Fの醍醐天皇受苦の場面を追記という形で示す構成になっている。

『夢記』もしくは『冥途記』は「北野天神縁起」の中の「日蔵（道賢）六道めぐりの段」の典拠となっており、これまで、天神信仰の流れの中で担った役割、意義について多く論じられている^七。しかし、日蔵上人蘇生譚を単体で見るとき、誰がどのような目的でこの話を作ったかははっきりしていない。

先行研究では、真壁俊信氏が、北野天満宮創建に関わった天台宗系の文献と『夢記』を比較し、『夢記』は「真言宗の立場からみた菅原道真論であり」、「天神信仰論である」と指摘され^八、今堀太逸氏は、『道賢上人冥途記』は天慶四年の出来事として語られているが、北野社創建以後の編纂であり、災害と仏教との関係を説くことにより、北野社における道真祭祀（火雷神）を批判し真言密教による祭祀（日本太政威徳天）を提案するために制作されたものではないか^九という説を提示されている^{一〇}。また、

山本五月氏は、満徳天が言う、大沢の池周辺に堂宇を建立せよという指示は、具体的には大覚寺の再興を指し、『日藏夢記』は、大峰修験道再興にかかわった醍醐寺を中心とする真言系の僧たちが荒廃していた大覚寺の再興をめざす勸進のために語り始めた伝承^二と推定されている^三。

このように、『夢記』は、北野天満宮での祭祀を中心とした天神信仰の流れとは少し違った立場で書かれたものではないかとみられているが、その製作意図に関しては現在も確定するには至っていない。また、先行研究では延喜帝や満徳天の託宣の部分を中心として考察されることが多い。そこで本稿では、現存する書物のなかでは、日藏上人蘇生譚の原型に最も近いと考えられる『夢記』を対象にし、『夢記』がどのような意図で作られたのかという問題意識のもと、考察を進める。その際、特に、延喜王や満徳天が抜苦の法・太政天祭祀の方法を指示する託宣的な部分以外に目を向け、日藏を中心としたとき、本話が全体としてどのような性格を持つ話であるかを考えてみたい。

以下、『夢記』がどのような先行文献から影響を受けてつくられているかという点を考察し、それをふまえた上で、現在先行研究の中で具体的に『夢記』の成立に言及されている山本五月氏の論を検討し、まとめとする。

一、先行文献の受容―平安時代の説話集との比較

まず、『夢記』がどのような素材から影響を受けて作られているかを検討する。どのような話であっても、全くのオリジナルではなく、既に存在している話から何らかの影響を受けて成立していると思われる。『夢記』の成立時期ははっきりしないが、先行研究をふまえ^三、ここでは遅くとも十一世紀初頭には成立していたと見ておくことにし、先行する文献や、あまり時代が下らないうちに成立した説話集に見える説話などとの関連を検討していく。

『夢記』は、日藏が頓死し、金峯山を拠点として、金峯山浄土、太政威徳天城、斗率天、地獄、満徳法主天城を順に訪ねて蘇生するという展開であり、一般に、頓死した人物が蘇生することを得て死後の世界のことを周囲の人々に語るといふ蘇生譚の型に属するものと見られている。蘇生譚は『日本国現報善悪霊異記』（以下『霊異記』と略記する）に数多く収められており、すこし時代が下るが、『大日本国法華経験記』（以下『法華験記』と略記する）や『今昔物語集』にも多くみられる話である。そのなかで、『夢記』と類似する展開をとるものとしては、『霊異記』上巻第三十、中巻第十九、『法華験記』巻上第八、巻下第一百八などが挙げられる^四。

『靈異記』中卷第十九の前半は、経を読むのが上手い僧侶が、閻羅王のもとへ呼ばれて読経し、閻羅王から賞讃されるという話であり、上巻第三十は、膳臣広国という人物が妻の訴えによって地獄へ呼ばれるが罪がなく許され、その折に地獄を見てまわっていたところ地獄で苦を受ける父に会い、現世に戻って供養しよう頼まれるという話である。これらは、『夢記』梗概Fで、日蔵が閻羅王の前で読経するという展開と、地獄の様子をみてまわっている際に醍醐天皇から抜苦の法を修めるよう頼まれるという展開に似通っている。また、『法華験記』巻下第百十八は加賀前司兼隆の第一の女が極楽か斗率天かと思われる場所に至り、仏の姿をみて一層精進するよう告げられるという話であり、『夢記』梗概Eと同じような展開になっている。『法華験記』巻上第八は、妙達という高德の僧侶が、閻羅王のもとに呼ばれて「日本国の中の善悪の衆生の所行作法」を教えられ、善を勧めて悪を戒め衆生を利益せよと告げられるという話で、『夢記』で日蔵が、蔵王菩薩のもとで世間の災難の根源を教えられ、それを広く教えて衆生を利益せよといわれるという設定と類似している^{一五}。

このように、『夢記』の部分的な展開は、平安時代の説話集に見られる蘇生譚と共通するところが見られ、その影響を受けていることは明らかである。同時代の蘇生譚と比較したとき、話の長さや複雑さという点においては『夢記』

は異質であるといえるが、頓死した後蘇生するという話の大枠も蘇生譚の型に則ったものであり、部分部分に見られる要素も同時代の蘇生譚にみられるパターンとして珍しいものではないと思われる。

二、金剛蔵王菩薩について

平安時代の説話集のなかの説話とは部分的に類似する点が見られたが、それらは地獄や天上界のみに赴くというパターンがほとんどで異界をめぐるという形は稀であり、『夢記』の構想にはまた別の素材の影響があった可能性が考えられる^{一六}。『夢記』では、日蔵は異界に招かれるという形ではなく、金剛蔵王菩薩の計らいによって異界へ赴くという形をとっている。そこで次に、異界めぐりという構想の中心となる存在である蔵王菩薩に注目してみたい。

金剛蔵王菩薩は、平安時代初期に金峯山独自の崇拜対象として案出された、仏典には見られない仏である。中世になり金峯山が修験道の拠点となるにおよんで、修験道の祖と言われる役小角が感得した仏で、本地は弥勒であると伝えられるようになった^{一七}。蔵王菩薩の本地を示した初例とされる^{一八}記述が、中国の文献である『義楚六帖』にみえるが、そこでも蔵王菩薩は弥勒の化身とされている^{一九}。

一方で、蔵王菩薩は釈迦とも関連付けて考えられていた。

織田得能著『織田佛教大辞典』では、金剛藏王は金剛薩埵の变化身であり、釈迦も金剛薩埵の变化身なので、その変体において同一であるというを得たとされている^{二〇}。また、金峯山出土の藤原道長の経筒（一〇〇七年）には「南無教主釈迦藏王権現知見証明、願与神力、円満弟子願法界衆生^{二一}とあり、平安時代には藏王菩薩と釈迦は関連づけられていたことがうかがえる。『夢記』の中では藏王菩薩は、「牟尼化身藏王菩薩也」とされているが、それもこのような信仰をもとにしたものだろう。

藏王菩薩が釈迦の化身であるという設定を念頭に置いて『夢記』を見てみると、話の中に釈迦にまつわるモチーフが取り入れられていることに気が付く。例えば、日藏が異界めぐりを終えて金峯山に戻ってきた場面で、藏王菩薩は日藏の頂を摩でて次のように述べる。

金剛藏王大菩薩云く、「我汝に世間の災難、衆生の苦悩の根源を知らしむ、広く仏事を作し、衆生を利益せよ、故に一切普聞を宣べ知らしめよ」、即ち手を申べて頂を摩でて曰く、「人身得難し、汝已にこれを得る、佛身見難し、汝能く見る、能く三業を護り、放逸を得ざれば、地獄を捨離し、天堂に往生す」、宣教授既に畢りて、重ねて洛に帰せしむ

〔原文〕金剛藏王大菩薩云、我令汝知世間災難衆生苦悩之根源、広作仏事、利益衆生、故令一切普聞知宣、

即申手摩頂曰、人身難得、汝已得之、仏身難見、汝能見、能護三業、不得放逸、捨離地獄、往生天堂、宣教授既畢、重教帰洛

ここに見られる「摩頂」という行為は、『法華経』嘱累品第二十二に見える、釈迦が法を付嘱する行為をもとにしていると考えられる。『法華経』の中では以下のような記述になっている。

その時、釈迦迦牟尼仏は法座より起ちて、大神力を現わし、右の手を以つて無量の菩薩・摩訶薩の頂を摩でて、この言を作したもう「われは無量百万億阿僧祇劫において、この得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今、以つて汝等に付嘱す。汝等よ、应当に一心にこの法を流布して、広く増益せしむべし」と。かくの如く三たび諸の菩薩・摩訶薩の頂を摩でて、この言を作したもう「われは無量百万億阿僧祇劫において、この得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今、以つて汝等に付嘱す。汝等よ、当に受持し説誦して、広くこの法を宣べ、一切の衆生をして普ねく聞知することを得せしむべし。」^三

このように、『夢記』は、藏王菩薩が釈迦の化身であるということを意識した描かれ方になっていると考えられる。そして、藏王菩薩が釈迦の化身であるという点に注目すると、『夢記』の異界めぐりという構造に影響を与えた

素材として、次節で挙げる、釈迦が弟子を教化するために天と地獄をみせたという説話との関連が指摘できるように思われる。

三、『増一阿含経』慚愧品第十八―七との関連

『増一阿含経』慚愧品第十八―七には次のような話がある。

仏が舍衛国祇樹給孤独国にいらつしやつた時に、弟子の難陀が欲心をとどめられず修行をやめようとした。そこで世尊は難陀を手に執り、神力を以つて香山上に至り、山の巖穴に住む獼猴を見せた。難陀が思いを寄せる孫陀利釈女と獼猴ではどちらが美しいか聞くと、難陀は当然孫陀利であると言った。次に、世尊は神力を以つて三十三天に至り、天の様子を見せた。女人ばかりで男子がいないことを不思議に思つて難陀が天女に問うと、世尊の弟子難陀を迎えるためであると言つた。世尊が天女と孫陀利どちらが美しいか問うと、難陀は、天女のほうが美しい。獼猴と孫陀利を比べる如く明らかである、と答えた。世尊は、よく修行すれば天に生じ天女を得ることができると教えた。次に世尊は難陀を地獄へ連れて行き、地獄の様子を見せた。獄卒はいるが苦を受ける者がいないのを不思議に思つて

問うと、世尊の弟子難陀が天での寿命を終えて地獄に来るのを待つているのだという。難陀はそれを聞いて恐ろしくなり、懺悔した。世尊は、天よりも地獄よりも、解脱し涅槃に至ることが最もよいことだと教え、難陀に法を説いた。そうして難陀は阿羅漢を得るに至つた。^{三三}

この話は『今昔物語集』巻第十八の原拠ともなっており、人々の関心を引く話であつたと思われる^{三四}。ここでは蘇生という要素は見られず、生身のまま天と地獄をめぐることになつているが、蔵王菩薩が釈迦の化身とみられていたことからこのような説話が引き寄せられ、『夢記』の構想の基になつた可能性が考えられる。釈迦が神力によつて瞬時に弟子を異界に連れて行くとされているように、『夢記』でも蔵王菩薩が異界のある方角に手を伸ばし、その指先をみると思うと異界へ至つていたと表現され、蔵王菩薩がその神力で異界を自由に行き来できる存在として描かれているという点でも、その影響がみられるのではないかと思う。

この話をふまえ、『夢記』の斗率天と地獄の場面を見直してみる。『夢記』の日蔵の場合も、梗概Eで斗率天に至つて、光り輝き荘嚴な天の様子をみて、弥勒菩薩と対面した後、蔵王菩薩から、「汝我が教えに随ひ、精進すれば此の生已むる後に必ず彼の天に生ずるべし（原文）汝随我

教、精進此生已後可必生彼天」と告げられている。この場面は、蔵王菩薩の言う、世間の災難の根源を知らせるといふ目的に、直接には繋がらない。また、続く梗概Fで地獄に至り、閻羅王と対面し、人々が苦を受けて救いを求める様子を見てまわつて恐怖を抱いた後に、蔵王菩薩より、「若し人因果を信じざれば、終らしむる時直に彼の地獄に入ることを、箭を射るが如し（原文）若人不信因果者、令終時直入彼地獄、如射箭」と告げられている。そして、梗概Hでは、蔵王菩薩から、世間の災難の根源を知らせるために遣わしたのだと述べられると同時に、「能く三業を護り、放逸を得ざれば、地獄を捨離し、天堂に往生す（原文）能護三業、不得放逸、捨離地獄、往生天堂」といわれて話が締め括られている。このように、『夢記』にも、釈迦と難陀の説話に見られるような、仏弟子を教化するという構造が含まれていると考えられる。

時代背景から言えば注目されるのは太政威徳天や延喜王であり、蔵王菩薩が何度も述べているように、日蔵の異界めぐりの一番の目的は、太政威徳天や延喜王、満徳法主天に会つて、世間の災難や衆生の苦悩の根源を知ることにあつただろう。しかしその裏には、釈迦が難陀を教化する説話に見られるような、天と地獄をみせて更に精進するよう諭すという唱導的な目的がみられる。そして、釈迦と難陀の説話ではその信仰の対象が釈迦であつたが、ここではそ

れが蔵王菩薩であることから、『夢記』は異界めぐりの展開の中で、暗に蔵王菩薩への帰依を説いていると読み取ることもできるのではないだろうか。

また、唱導という点に注目すると、日蔵が異界をめぐるなかで出会う人々も、それに合わせて造形されていることが指摘できる。すなわち、太政天はその怨心によつて世間の一切の災難の原因とされるが、密教の隆盛により怨心が減つて巨害を為さずにとどまつているとされ、日蔵が斗率天で出会う日本延喜王東宮太子（保明親王）は、時平の妹穩子と醍醐天皇の子であり、道真の霊の崇りで天折したのではないかと噂された人物であつたが、『夢記』では生前に仏法を尊重していたために天に生じたとされ、日蔵が地獄で対面する延喜王は、礼拝しようとする日蔵に向かって、「敬うべからず、冥途は罪無きを王と為す、貴賤を論ぜず（原文）不尊敬、冥途無罪為王、不論貴賤」と述べている。仏弟子を教化するための異界めぐりという視点で見たとき、太政天は、密教が世間の災難の根源をなだめることができる優れたものであるということ、延喜王東宮太子は、仏法を尊重していたかどうかを絶対基準として天に生じるか地獄に生じるかが判断されるといふことを、延喜王は、地獄では身分にかわり無く罪があるかないかを絶対基準として苦を受けるといふことを、それぞれ示す役割を担つているとも考えられるのである。^七

以上、『夢記』がどのような文献から影響を受けて作られているかを考察することによって、部分的に見られる展開は同時代の蘇生譚としては珍しいものではないこと、話の構成上、蔵王菩薩が重要な役割を担っており、日蔵を中心としたときの話の展開のなかに、蔵王菩薩に対する信仰や唱導的な要素が織り込まれていることがわかった。次に、このことをふまえて、山本五月氏の論考を検証する。

四、山本五月氏の見解について

山本氏は、『夢記』の成立に関して次のような論を提示されている。

私は、永久寺本『日蔵夢記』は、醍醐寺を中心とした真言系の僧によって、大覚寺の再興を目指す勸進のために、創作されたものと推定している。その理由として、『日蔵夢記』には、聖宝、観賢、静賢という、醍醐寺と深い関係を持つ僧侶の名が見えることがあげられる。醍醐寺は、後に当山派と呼ばれる、真言系の修験道の中心寺院であり、特に聖宝は大峰修験道を再興したことで有名である。また、『日蔵夢記』の宇多天皇が嵯峨野の大沢池に小島を造って大威徳城を象った楼閣を建て、さらにその北山に小堂を建てて五大明王

ならびに護世一切天等の像を安置せよと命じる部分
は、大覚寺の再建を示すものと考えられるのである。
二八。

現在先行研究のなかでは、『夢記』の成立に関して最も深く言及されているのがこの論だと思われる。この論に対して竹居明男氏は、大覚寺を想起させる記述がみられることを肯定しつつも、山本氏が着目しているのはあくまで『夢記』の一部分であり、全体としてそのように解釈できるかは検討の余地があると指摘されている^{二九}。以下、山本氏の論の内容を確認しつつ、検討を加えてみたい。

山本氏が注目した満徳法主天（宇多法皇）との対面の場面は、

我金峯に於て、汝三世の事を聞く、汝若くして退縁に逢ひ、恐れを為し善利を告ぐ、淨利を示し歡喜せしめ、地獄を示し怖畏せしむ、聖旨かくの如く希有なるかな、仏子親く仏の声教を聞く、甚だ奇特なり

〔原文〕我於金峯、聞汝三世之事、汝若逢退縁、為恐告善利、示淨利令歡喜、示地獄令怖畏、聖旨如是希有哉、仏子親聞仏声教、甚奇特也

と、満徳天がこれまでの展開を振り返る形で話を始め、梗概Dの太政天と、梗概Fの延喜王の語った内容を補う形で話が進んでいくところであって、『夢記』全体の錯綜する展開を、総括するような書かれ方になっている。そこで満

徳天が述べる要求の内容は、おおまかに言うると以下のよう
なものである。

- ・ 太政威徳天祠、日本大天祠を建立すること
 - ・ 嵯峨野の大沢池に一小島を造り、大威徳城を模した楼閣を造ること
 - ・ その池の北山に一小堂を建立し、五大明王と護世一切天等の像を安置すること、また、竜に乗った満徳法主天像を東方に、鳳に乗った日本太政威徳天像を西方に造り、東西二王のように造ること
 - ・ その小堂の左右に一祚殿を建立し、日本太政威徳天寺と号すること
 - ・ その寺で四月十五日、十月十五日に法要を行い、正月一日に大王が行幸すること、法華三昧・真言大法を修すること
 - ・ 天慶三年を太政元年に、大臣号を摂政大臣に、延喜通宝を太政通宝に改めること
 - ・ 金峯山の権現牟尼に奉仕すること
- この中で最も力を入れて語られているのが、嵯峨野の大沢池とその北山に建てる建築物のことであるといえる。この記述が大覚寺を想起させることは既に竹居氏が指摘されている。竹居氏、山本氏によると、いつ頃作られたものかは定かではないが、嵯峨野の大沢池には天満宮の存する天神島があり、そこには、嵯峨院を改めて大覚寺と為す時の奏

請文を菅原道真が書いたことから後に天神社が祀られ島の名前となったという伝承があるという。また、大覚寺の本尊は五大明王であり、『大覚寺伽藍古図』によると、大覚寺はかつて大沢池の北方を中心に広大な伽藍を誇っていたとされる³⁰。満徳天も、大沢池に一小島を造って大威徳城を模した楼閣を造ることや、池の北方に小堂を造り、五大明王を安置することなどを要求しており、両氏が言うように、この記述は大覚寺を連想させ、『夢記』と大覚寺の関連は無視できないと思われる。

また、『夢記』は基本的には太政天の祭祀を要求することを目的としているが、『夢記』全体の展開を追っていくとわかるように、そこには延喜王と満徳天の存在が大きく関わっている。本稿の冒頭で述べた背景のもと、十世紀後半頃から『夢記』以外にも道真の霊を祀ることを主張する文献が製作されているが、それらの多くは、道真の霊の持つ怨霊的側面よりも善神的側面を前に出して、道真を祭祀すればその加護を得られるということを示し、祭祀を要求している³¹。それに比べて『夢記』は、道真の怨霊としての性格を強調し、太政天の怒りを鎮めることで、延喜王は地獄の苦から解放されて天に生じることができ、満徳天も太政天の悪を防ぐ役目を終えて天に生じることができる³²と述べる。つまり、太政天を祀ることで、間接的に醍醐天皇や宇多法皇が救われると主張して祭祀を要求している

考えられる。このような話が作られ、受け入れられるためには、醍醐天皇、宇多法皇と、話を作る側、受容する側になんらかの繋がりが必要になってくると思われる。山本氏が『夢記』を語り始めた人物として指摘する僧たちは醍醐寺と関りが深く、その醍醐寺は醍醐天皇の御願寺である。

また、平岡定海氏によると、十世紀前半頃に、宇多法皇が開いた仁和寺の勢力がしだいに大覚寺吸収へと動いて、大覚寺は仁和寺のもとで真言宗化していったという……。醍醐寺は醍醐天皇と、大覚寺は宇多法皇とそれぞれ縁が深く、山本氏の論にそって考えれば、『夢記』の中で醍醐天皇と宇多法皇の存在が強調されていることも理解できると思われる。

しかし一方で、これまで確認してきたように、『夢記』は金峯山が舞台になっていくだけでなく、話の中に蔵王菩薩に対する信仰と唱導的要素を織り込んで構成されていると考えられる。大覚寺は、鎌倉時代には龜山上皇や後宇多上皇が入住して院政を行ったように、政治と関りの深い寺院であるが、金峯山や修験と深い関りがあるわけではない^{三三}。確かに真言系の寺院ではあるが、その再興という目的と、蔵王菩薩や金峯山への信仰を説くという目的は、即繋がるものではないと思われる。山本氏が『夢記』を語り始めたとして挙げるのが醍醐寺を中心とする僧たちであり、醍醐寺は早くから修験道と関係を持っていたとされる

ため、金峯山が話の舞台となることは不自然ではないといえるかも知れない。しかし、『夢記』は金峯山が舞台となつていくだけでなく、蔵王菩薩への信仰を説こうとする意図がみられるため、『夢記』全体が大覚寺再興のための勸進を目的として作られたと言いつつ切るためには、さらに、大覚寺と蔵王菩薩への信仰がなぜ結びついているのかという点を追求していく必要があると思われる。山本氏が指摘するように、『夢記』と大覚寺は無関係とは思えない。しかし、大覚寺再興のための勸進という目的と、蔵王菩薩への信仰を説くという目的は直接繋がるものではないと思われる、現段階では竹居氏の指摘するように、『夢記』全体を大覚寺再興のための勸進に利用された話と言いつつ切ることができないと考える。

おわりに

本稿では、『夢記』がどのような意図で作られたのかという問題意識のもと、考察を進めたが、『夢記』がどのような性格を持つ話であるかを明らかにするという基礎作業段階にとどまり、その成立について深く追求することができなかつた。

前半では、『夢記』がどのような素材から影響を受けて作られているのかを考察し、同時代の蘇生譚の影響を受け

ており基本的にはその型に基づいていること、部分的に見られる展開は、蘇生譚の展開として珍しいものではないことを指摘した。さらに、蔵王菩薩に注目し、『夢記』の中に蔵王菩薩が釈迦の化身であるということを意識した要素が見られること、釈迦が仏弟子を教化するために天と地獄を見せるという説話が『夢記』の構成に影響を与えていること、それをふまえて話を見たときに蔵王菩薩に対する信仰を説くという構造が話の展開に織り込まれていることを指摘した。そして、後半ではそれをふまえて山本五月氏の論を検証し、『夢記』全体が大覚寺再興のための勸進を目的として作られたと言い切るためには、蔵王菩薩への信仰と大覚寺再興を再興することとがどう繋がっていくのかを追及していく必要があることを指摘した。

『夢記』の成立を明らかにしていくために、今後は蔵王菩薩への信仰と大覚寺との関連、そして金峯山と道真の霊とがなぜ結びついたのかという点を追求することが課題となる。

注

一 この段落は、西田直二郎「普公と天満宮」（村山修二編『天神信仰』民衆宗教史叢書第四巻、雄山閣、一九八三年）第二章による。

二 日藏上人蘇生譚を載せる文献としては、『宝物集』、『十訓抄』、『沙石集』、『真言伝』などが挙げられる。詳しくは、山本五月「道賢（日藏）伝承の展開」（『アジア遊学』二十二、勉誠出版、二〇〇〇年）を参照。

三 「日藏上人蘇生譚」原本の存在と、日藏蘇生譚を引用する諸本との関係については、山崎裕人「日藏上人蘇生譚に関する考察」（都留文科大学国文学会『国文学論考』十七、一九八一年所収）を参照。

四 この作品の名称は虫損のため明らかでないが、『梅城録』に引用される『日藏夢記』の記事と一致するところのみられるため、本書も『日藏夢記』とよばれていたものと推測されている（真壁俊信「解題」、『神道大系』神社編十一北野、神道大系編纂会、一九七八年）。ここでもそれに倣い、『日藏夢記』と表記する。

五 『夢記』梗概と以降の引用に使用する本文はすべて、真壁俊信校注『神道大系』神社編十一北野による。梗概化に当たっては私に段落を設定し、段落ごとに記号を付した。引用に当たっては、原漢文を私に読み下した。

六 真壁俊信「解題」（『神道大系』神社編十一北野）

七 注六の論文を参照。

八 「北野天神縁起」諸本の「日藏六道めぐりの段」と『冥途記』、『夢記』の共通箇所については、竹内光浩「天神信仰の原初的形態——道賢上人冥途記」の成立をめぐる」（『十世紀研究会編『中世成立期の歴史像』東京堂出版、一九九三年所収）を参照。

九 例えば笠井昌昭氏は、柳田国男氏（『雷神信仰の変遷』、同著

『妹の力』所収)の論を受け、『冥途記』の役割は「菅公に擬されていた火雷神をば、即道真ではなく、その第三の使者であるとして、菅公をさらに数段高い統御者の地位に据えようとしたものである」と指摘されている(笠井昌昭「天神縁起説話の成立」、太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』上巻、吉川弘文館、一九七五年所収)。

一〇 眞壁俊信「日藏上人の伝承にみえる天神信仰」(同著『天神信仰の基礎的研究』日本古典籍註釈研究会、一九八四年所収)

一一 今堀太逸「日本太政威徳天と災害―『道賢上人冥途記』の成立―」(大隅和雄編『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三年所収)

一二 山本五月『道賢上人冥途記』の成立―『北野文叢』所収永久寺本を中心に―(仏教文学研究会編『仏教文学』二十二、一九九八年所収)

一三 『夢記』の成立時期に関しては、天徳年間(九五七―九六〇)以前の成立とみる説(加島吉春『日藏夢記』解題と諸問題)、『アジア遊学』二十二、勉誠出版、二〇〇〇年所収)、康保年間(九六四―九六八)を重視した説(注一〇眞壁氏の論文、注八竹内氏の論文)、道真に太政大臣が贈られた正歴四年(九九三)以降を重視する説(山崎裕人「日藏蘇生説話について―『内山永久寺本』を中心に―」中野猛編『説話と伝承と略縁起』新典社、一九九六年所収)などがある。確定は困難で、本稿では遅くとも十一世紀初頭には成立していたとみておくことにする。

一四 蘇生譚との関連については、既に山崎裕人氏が「日藏蘇生説話について―『内山永久寺本』を中心に―」において、「僧

などが善行によつて天上界に招かれるという説話」として『今昔物語集』巻六第三十二、巻十三第三十六、巻十五第十九を、「冥界に招待され、その有様を見聞するという形をとる」として『今昔物語集』巻十三第十三、巻十四第三十一などを指摘されている。

一五 『靈異記』は、出雲路修校注『日本靈異記』新日本古典文学大系三十、岩波書店、一九九六年、『法華験記』は井上光貞他校注『往生伝 法華験記』日本思想大系七、岩波書店、一九七四年を使用した。

一六 確認した限りでは、十一世紀初頭までに成立していたとされる説話集には異界めぐりという型の蘇生譚は見られず、平安時代でも、一一五一年成立とされる『本朝新修往生伝』(井上光貞他校注『往生伝 法華験記』日本思想大系七、岩波書店、一九七四年所収)に、円能という僧侶が六地藏の導きで極楽と地獄を見て蘇生したという話が見られる程度だった。

一七 宮家準「金峯・大峰の遺跡と遺物」(宮家準編『御獄信仰』民衆宗教史叢書第六巻、雄山閣、一九八五年所収)

一八 首藤善樹『金峯山寺史』国書刊行会、二〇〇四年

一九 『義楚六帖』第二十一「国城市部第四十三」の「日本国」による。(義楚撰『義楚六帖』朋友書店、一九七九年)

二〇 織田得能『織田佛教大辞典』大蔵出版、一九六九年(初刊は、大倉書店、一九一七年)。

二一 首藤善樹編『金峯山寺史料集成』国書刊行会、二〇〇〇年より引用。

二二 坂本幸男他訳注『法華経』下、岩波文庫、一九六七年、によ

る。原文は漢文表記。

二三『国訳一切経』阿含部八、大東出版社、一九二九年、による。本文は漢文からの書き下し文だが、現代語に訳し要約した形で示している。

二四ただし、『今昔物語集』の出典は『増一阿含経』ではなく、釈迦譚所引の普曜経（現在の出曜経）、雜宝藏経本文を適宜難採する形で記載されている（今野達校注『今昔物語集』一、新日本古典文学大系三三三、岩波書店、一九九九年、五五頁）。

二五 古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店、一九九四年による。

二六『日本紀略』延長元年三月廿一日の条では、「皇太子保明親王薨、年廿一、天下庶人莫不悲泣、其声如雷、举世云、菅帥靈魂宿忿所為也」とされている（引用文は、黒坂勝美・国史大系編纂会編『新訂増補国史大系』十一日本紀略後編・百鍊抄、吉川弘文館、一九六五年による）。

二七この段落の記述は、村上学「日藏の地獄巡り―道賢上人冥途記」と『北野天神縁起』（『国文学解釈と鑑賞』五十五巻八号、一九九〇年所収）を参考にしている。

二八注二の山本氏論文より引用。詳しい考察については、注一二の論文を参照。

二九 竹居明男『道賢上人冥途記』・『日藏夢記』備考―史実との関係、ならびに登場人物、全体構成、表現の相違等をめぐって―（同志社大学『人文学』一七六、二〇〇四年所収）

三〇 竹居明男「永久寺本『道賢上人冥途記』に関する二、三の問題」（『古代文化』三十九巻一号、一九八七年所収）及び、注一

二の論文による。

三二 例えば、天慶五年（九四二）に多治比奇子へ下った託宣を記す『北野天満自在天神宮創建山城葛野郡上林郷縁起』では「既に天神の号を得て、鎮国の思ひ有り、須く早く彼の処に進発すべし、聊か我が禿倉を結構し、潜に鬻寄る便を得せしめよ」とされており、天慶九年（九四六）に比良宮の禰宜である神良種の子に下った託宣を記す『天慶九年三月二日酉時天満天神御託宣記』では、道真の霊の怨霊としての性格を記述した後、「世界に詫び悲ぶ衆生どもみれば、何で救はむとのみぞ思ふ、我筑紫に有りし程に、常に仏天を仰ぎて祈願せし様は、若し命終なば、当世に我が如き慮外の災に遇はむ人、惣て侘び悲しむ者をば、助救ひ、人を沈め損せむ者をば、糺す身と成らむと願して、思ふ如くに成たり」となっている（引用文はすべて真壁俊信校注『神道大系』神社編十一北野により、私に読み下した）。

三三 平岡定海『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一年の第三章「平安時代における寺院の成立と構造」を参照。

三四 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第八巻、吉川弘文館、一九八七年の大覚寺、醍醐寺の項を参照。

参考文献・引用文献

出雲路修校注『日本霊異記』新日本古典文学大系三十、岩波書店、一九九六年

井上光貞他校注『往生伝 法華験記』日本思想大系七、岩波書店、一九七四年

今堀太逸「日本太政威徳天と災害―『道賢上人冥途記』の成立

―(大隅和雄編『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三年所収)

織田得能『織田佛教大辞典』大蔵出版、一九六九年

笠井昌昭「天神縁起説話の成立」(太宰府天満宮文化研究所編『菅

原道真と太宰府天満宮』上巻、吉川弘文館、一九七五年所収)

加島吉春『日蔵夢記』解題と諸問題』(『アジア遊学』二十二、

勉誠出版、二〇〇〇年所収)

義楚撰『義楚六帖』朋友書店、一九七九年

黒坂勝美・国史大系編纂会編『新訂増補国史大系』第十一巻日

本紀略後編・百鍊抄、吉川弘文館、一九六五年

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第八巻、吉川弘文館、

一九八七年

古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店、一

九九四年

今野達校注『今昔物語集』一、新日本古典文学大系三三、岩波

書店、一九九九年

坂本幸男他訳注『法華経』下、岩波文庫、一九六七年

首藤善樹『金峯山寺史』国書刊行会、二〇〇四年

首藤善樹編『金峯山寺史料集成』国書刊行会、二〇〇〇年

竹居明男『道賢上人冥途記』・『日蔵夢記』備考―史実との関係、

ならびに登場人物、全体構成、表現の相違等をめぐって

―(同志社大学『人文学』一七六、二〇〇四年所収)

―「永久寺本『道賢上人冥途記』に関する二、三の問題」

『古代文化』三十九巻一号、一九八七年所収)

竹内光浩「天神信仰の原初的形態―『道賢上人冥途記』の成立をめぐって―」(十世紀研究会編『中世成立期の歴史像』

東京堂出版、一九九三年所収)

西田直二郎「菅公と天満宮」(村山修一編『天神信仰』民衆宗教

史叢書第四巻、雄山閣、一九八三年)

平岡定海『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一年

真壁俊信校注『神道大系』神社編十一北野、神道大系編纂会、

一九七八年

真壁俊信「解題」(『神道大系』神社編十一北野、神道大系編纂

会、一九七八年所収)

―「日蔵上人の伝承にみえる天神信仰」(同著『天神信仰の基礎的研究』日本古籍籍註釈研究会、一九八四年所収)

宮家準「金峯・大峰の遺跡と遺物」(宮家準編『御嶽信仰』民衆

宗教史叢書第六巻、雄山閣、一九八五年所収)

村上学「日蔵の地獄巡り―『道賢上人冥途記』と『北野天神縁

起』(『国文学解釈と鑑賞』五十五巻八号、一九九〇年所

収)

山崎裕人「日蔵上人蘇生譚に関する考察」(都留文科大学国文学

会『国文学論考』十七、一九八一年所収)

―「日蔵蘇生説話について―『内山永久寺本』を中心として―」(中野猛編『説話と伝承と略縁起』新典社、一九

九六年所収)

山本五月「道賢(日蔵)伝承の展開」(『アジア遊学』二十二、

勉誠出版、二〇〇〇年所収)

—— 『道賢上人冥途記』の成立—— 『北野文叢』所収永久寺
本を中心に—— (仏教文学研究会編 『仏教文学』二十二、
一九九八年所収)

『国訳一切経』阿含部八、大東出版社、一九二九年

※一部参考文献において旧字体の漢字が用いられているが、引
用にあたっては新字体に改めた。また、句読点、ルビ等を適
宜付けている。

(おかだ・まゆみ 平成二十一年度卒業生)